少年の日の思い出 (2)

（「ぼく」は少年のころ、チョウの収集をしていました。）

ぼくの両親はりっぱな道具なんかくれなかったから、ぼくは自分の収集を、古いつぶれたボール紙の箱にしまっておかねばならなかった。びんのせんから切りぬいた丸い※キルクを底にはりつけ、ピンをそれにとめた。こうした箱のつぶれた壁のあいだに、ぼくは自分の宝物をしまっていた。初めのうち、ぼくは自分の収集を喜んでたびたび仲間に見せたが、ほかのものはガラスのふたのある木箱や、緑色のガーゼをはった飼育箱や、その他ぜいたくなものを持っていたので、自分の幼稚な設備を自慢することなんかできなかった。それどころか、重大で、評判になるような発見物や獲物があっても、ないしょにし、自分の妹たちだけに見せる習慣になった。あるとき、ぼくは、ぼくらのところでは珍しい青い※コムラサキを捕えた。それを※展翅し、乾いたときに、得意のあまり、せめて①隣の子どもにだけは見せよう、という気になった。それは、中庭の向うに住んでいる先生のむすこだった。この少年は、非のうちどころがないという悪徳を持っていた。それは子どもとしては二倍も気味悪い性質だった。彼の収集は小さく貧弱だったが、小ぎれいなのと、手入れの正確な点で一つの宝石のようなものになっていた。彼はそのうえ、いたんだりこわれたりしたチョウの羽を、※にかわでつぎあわすという、非常にむずかしい珍しい技術を心得ていた。とにかく、②あらゆる点で、模範少年だった。そのため、ぼくはねたみ、嘆賞しながら彼をにくんでいた。

この少年にコムラサキを見せた。彼は専門家らしくそれを鑑定し、その珍しいことを認め、二十※ペニヒぐらいの現金の値打ちはある、と値ぶみした。しかしそれから、彼はなんくせをつけ始め、展翅の仕方が悪いとか、右の触角が曲っているとか、左の触角が伸びているとか言い、そのうえ、足が二本かけているという、もっともな欠陥を発見した。ぼくはその欠点をたいしたものとは考えなかったが、こっぴどい批評家のため、自分の獲物に対する喜びはかなり傷つけられた。それでぼくは③二度と彼に獲物を見せなかった。

（高橋健二訳『ヘッセ全集2 車輪の下』新潮社 所収
「少年の日の思い出」による）

※キルク…コルク。　コムラサキ…チョウの一種。
展翅…標本にするために虫の羽を広げて固定すること。
にかわ…ゼラチンなどからなる動物性の物質で、接着剤などに用いられる。
ペニヒ…かつてのドイツの通貨単位。

確認テスト 本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ——線①「隣の子ども」に対して、「ぼく」はどのような感情をもっていたか。適当なものを選びなさい。

ア 自分よりもチョウの収集が小さくて貧弱なので、優越感を抱いていた。

イ 感心しつつも、欠点がない点をねたましく思い、好きになれないでいた。

ウ 自分にはない優れた技術をもっている点を尊敬し、「彼」を慕っていた。

エ 収集の手入れが正確で、「彼」のようになりたいとただただ憧れていた。

〔　　〕

(2) ——線②「あらゆる点で、模範少年」を言いかえた言葉となるように、解答欄に当てはまる言葉を本文中から十字で書きぬきなさい。

□□□□□□□□□□少年

(3) ——線③「二度と彼に獲物を見せなかった」のはなぜか。適当なものを選びなさい。

ア 「彼」が珍しいチョウであることを認めたことに満足し、それ以上「彼」にチョウを見せる必要がなかったから。

イ 「彼」がたいしたことのない欠点を指摘したことで、「彼」のチョウに対する鑑定が疑わしいように思えてきたから。

ウ 「彼」の批評のせいで珍しいチョウをとらえた喜びがうせてしまい、「彼」にチョウを見せる気にならなくなったから。

〔　　〕